

上代形容詞連用形の一側面——萬葉集においてミ語法との関係から——

大 秦 一 浩

上代の特殊な語法としていわゆるミ語法がある。具体的には「山ヲ高ミ」「山高ミ」という例に見られるように、形容詞語幹にミ語尾を接した形で、「山が高いので」

或いは「山が高く」などと一般に口語訳されているが、その文法的な位置づけについては諸論のあるところである。特に語尾であるミとは何なのか問題となり、現在のところ接尾語と捉える見方が優勢であると思われる。

品詞論上、その語性を究明することは重要であるが、本稿ではミ語尾そのものの性質に深く立ち入らず、口語訳にあらわれているように、ミ語尾が文を構成する上で、連用句として働くということに注目する。そして文の中でミ語尾を含む前半部分は、後句へと続く際に、動詞連用形の用法と同じ様に続いてゆくとする通説に則って論をすすめる。ただし、ミ語尾は動詞連用形と似た働きをするとは言え、やはり異なる点も多い（それ故ミ語尾は

単なる動詞語尾とは見なされない）。行論に従って、その異なる点についても触れてゆくことにする。

動詞連用形は、連用形名詞を除けば、連用句として次句にかかってゆくという機能は共通するものの、文脈に応じてさまざまな意味をあらわす。例えば「(鳥)来鳴く」という形は、「来」と「鳴く」とを複合したものと捉えて解される場合もあれば、「(ここに)やつて来て、鳴いている」と連続した動作と捉えられる場合もある。ミ語尾に二種の異なる口語訳があてられていることも、動詞の連用形の場合と同じく、文脈による差異が口語訳に反映されたものだとと言える。つまり、口語訳上のゆれは、解釈の問題であって、ミ語法そのものの性格とは直接つながらないと言えるだろう。

ミ語法が上代における特殊な語法とされるのは、ミ語尾の品詞論上の位置づけに異論があり、その性格を確定

しにくい状況であったからであろう。しかし特殊であるということは後代の国語体系に比してそうだと言い得るだけで、上代語体系の中では勿論特殊ではない。むしろその用例の多さから見て、上代語体系の中でミ語法が一つの表現方法としてはつきりとした存在理由があったと考えるべきである。国語体系の中にミ語法を位置づけるには、その表現領域の外縁部分における他の表現領域との関係が検討されなければならない。ここでいう他の表現領域としてまず想起されるのは、ミ語尾がその語幹に接していることから明らかなように、形容詞の各活用形の存在になるだろう。

形容詞の活用形の中で、ミ語尾に似た文法的意義を有するのは連用形である。例えば現代語で「山が高くそびえている」「山が高く登りにくい」という文において、形容詞連用形「高く」は、前者の場合、修飾法として「そびえている」という事態の属性を示し、後者の場合、中止法として「登りにくい」という事態の前提を示している。ミ語尾を含む句の「山(ヲ)高ミ」は、後に来る句に応じて「山が高いので」或いは「山が高く」という表現となり形容詞連用形の表現と重なり合う部分があることがわかる。従って、上代語におけるミ語法については、後句への続き方という点で、形容詞連用形との関連をまず考察しておかなければならないだろう。

以上の観点から、本稿ではまず萬葉集から形容詞連用形または、それに相当する用例を掲げ、その用法の具体的様相を確認する。なお、形容詞連用形は、ク語尾で連用接続(修飾法・中止法)であるものに限り、主題に浴わない次のようなものを除く。

- ① 補助活用(カリ活用)、それに準じて補助的なアリ・同類のシテが接するもの。
 - ② また連用形で終止してアリなどが省略されているもの。
 - ③ 引用のトが省略されたと考えられるもの。
 - ④ 終助詞モガ・モガモが接するもの。
 - ⑤ 助詞ハが接して仮定条件をあらわすもの。
 - ⑥ 助詞トモが接するもの。
 - ⑦ 格助詞が接しており名詞化しているもの。
- テキストには日本古典文学全集(小学館)を用い、品詞判別や用法区分の判断を下しかねるような場合には、その頭注・口語訳を参考にした。引用にあたっては、一字一音表記などで、連用形「ク」が確実に示される用例について、前句・後句の続き方を中心に必要な部分のみ示す。また、用例は、修飾法(1)と中止法(2)とに分類して提示する。

○あきらけく

1 (1は修飾法の用例である。以下同じ。)

「明けく(明久)我が知ることを」(3886)

○あづきなく

1 「あづきなく(小豆奈久)何のたはこと」(2582)「あづきなく(小豆鳴)男じものや恋ひつつ居らむ」

(2580)

○あやしく

1 「怪しく(安夜思苦)も嘆き渡るか」(4075)

○こたく

1 「いたく(伊太久)くたちぬ」(847)「いたく(伊太久)な吹きそ」(3592)「いたく(伊太久)吹きせば」(3616)「いたく(伊太久)し吹けば」(4006)「いたく(伊太久)吹くらし」(4017)「いたく(伊太久)な降りそ」(4222)「いたく(伊太久)恋ひらし」(4322)「心痛く(伊太久)昔の人し思ほゆるかも」(4483)

○こちしろく

1 「いちしろく(伊知此路久)出でぬ」(3935)「いちしろく(伊知白苦)身にしみ通り」(3811)「いちしろく(市白苦)しも我恋ひめやも」(2255)「こちしろく(市白苦)しも恋ひむ我かも」(2339)

○うつくしく

1 「愛しく(愛久)しが語らへば」(904)

○うつくしく

1 「うつくしく(打布)もまこと我妹子我に恋ひめや」(771)

○うらもとなく

1 「君が来まさぬうらもとなく(宇良毛等奈久)も」(3495)

○うらもなく

1 「うらもなく(宇良毛奈久)我が行く道に」(3443)

○おほく

2 (2は中止法の用例である。以下同じ。)

「直に逢はずあらくも多く(於保久)しきたへの枕去らずて夢にし見えむ」(809)

○おほ(ぼ)ほしく

1 「おほほしく(於保保思久)相見し児らを後恋ひむかも」(2446)「おほほしく(於保保思久)相見し児らを見むよしもがも」(2450)「おほほしく(於保保思久)見つつそ来ぬる」(3571)「おほほしく(於保保思久)角の松原思ほゆるかも」(3899)

「おほほしく(意保保斯久)今日や過ぎなむ」(884)

「おほほしく(意保保斯久)いづち向きてか我が別らむ」(887)「おほほしく(薜之若)呼びし舟人」(1225)「おほほしく(薜保久)待ちか恋ふらむ」(220)

○かしこく

- 1 「恐く(可之古久)も始めたまひて」(4098)「恐く(可之古久)も残したまへれ」(4111)「弓弾の騒きみ雪降る冬の林につむじかもし巻き渡ると思ふまで聞きの恐く(恐久)引き放つ矢のしげけく」(199)

○かなしく

- 1 「児らはかなしく(可奈之久)思はるるかも」(337)
- 2) 「悲しく(可奈之久)思ほゆ」(4016)
- 2 「かなしく(可奈之久)めぐし」(4106)

○からく

- 1 「辛く(可良久)もここに別れするかも」(3695)「辛く(辛久)垂れ来て」(3886)

○きよく

- 1 「川の瀬きよく(伎欲久)行く水の」(4002)
- 2 「浜清く(浄久)白波騒き」(4187)

○くやしく

- 1 「悔しく(久夜之久)妹を別れ来にけり」(3594)

○くるしく

- 1 「なにか苦しく(辛苦)相見そめけむ」(750)「苦しく(辛苦)も暮れ行く日かも」(1721)

○けながく

- 1 「君が行き日長く(気那我久)なりぬ」(867)「君が行き日長く(気長久)なりぬ」(90)「相見ず

て日長く(気長久)なりぬ」(648)

○こころがなしく

- 1 「心悲しく(許己呂我奈之久)夢に見えつる」(3639)

○こころづく

- 1 「心づく(情具久)照れる月夜にひとりかも寝む」(735)

「心づく(情八十一)思ほゆるかも」(789)

○こひしく

- 1 「妹が恋ひしく(古比之久)忘らえぬかも」(4407)「恋しく(古非之久)君が思ほえは」(3928)

「大和恋しく(恋久)鶴さはに鳴く」(389)

○さきく

1 「命を幸く(辛久)良けむ」(1142)

○さけく(東語)

1 「幸く(佐気久)あり待て」(4368)

○さぶしく

- 1 「待たすらむ心さぶしく(左夫之苦)」(4106)「(ま屋さぶしく(左夫斯久)思ほゆべしも」(795)

2 「心さぶしく(左夫之苦)はしきよし妻の命も」(3962)

○さむく

1 「寒く(佐牟久)吹くらし」(4018)

○さやけく

1 「音もさやけく(佐夜気久)万代に言ひ継ぎ行かむ」

(4003) 「川見れば見のさやけく(佐夜気久)ものこ
とに栄ゆる時と」(4360) 「さやけく(佐夜気久)負
む」(4467)

2 「川見ればさやけく(左夜気久)清し」(3234)

〇しづけく

1 「静けくも(静雲)君にたぐひて明日さへもがも」

(3010)

〇しなへ

1 「鄙とも著く(之流久)」だくも繁き恋かも」(4019)

「著く(之流久)標立て」(4096) 「春とも著く(之

流久)うぐひすは植ゑ木の木間を鳴き渡らなむ」

(4495) 「言はくも著く(知久)」(619) 「心も著く(知

久)照る月夜かも」(1596) 「来しくも著く(知久)」

(1724) 「植ゑしく著く(知久) 出で見ればやどの初

萩咲きにけるかも」(2113)

〇しろへ

1 「草の上白く(白久)置く露の」(785)

〇すかなく

1 「すかなく(須可奈久)のみや恋ひ渡りなむ」(4015)

〇すくなく

1 「すくなく(須久奈久)も妹に恋ひつつすべなけな

く」(3743) 「すくなく(須久奈久)も年月経れば」

(4118) 「すくなく(小九)も心の中に我が思はなく

く」(2581) 「すくなくも(小雲)吾の松原清からな
く」(2198)

〇すむやけく

1 「速けく(須牟也気久)はや帰りませ」(3748)

〇たかく

1 「高く(多可久)立ち来ぬ」(3627) 「高く(多可久)

立つ日に」(3675) 「高く(多可久)立ち来ぬ」(3710)

「高く(多可久)寄すれど」(4411)

2 「山高く(高来)川の瀬清し」(1052)

〇たのしく

1 「楽しく(多奴之久)遊べ」(4047) 「楽しく(多努

之久)遊ばめ」(4071) 「楽しく(多努志久)飲まめ」

(833)

〇たびまねく

1 「度まねく(多婢末祢久)申したまひぬ」(4254)

〇たひらけく

1 「平けく(多比良気久)親はいまさぬ」(4408) 「平

けく(多比良気久)舟出はしぬと」(4409) 「平けく

(平久)我は遊ばむ」(973) 「平けく(平久)齋ひ

て待てと」(3957) 「平けく(平久)率て帰りませ」

(4245)

2 「平けく(平気久)安くもあらむ」(897)

〇たふとく

1 「貴く(多不刀久)も定めたまへる」(4098)

2 「父母を見れば貴く(多布刀久)妻子見ればかなしくめぐし」(4106) 「まこと尊く(貴久)奇しくも神さびをるか」(245) 「見れば貴く(貴久)宜しなへ」(1005) 「貴く(貴久)嬉しき」(4273)

○ちかく

1 「遠くとも心を近く(知可久)思ほせ我妹」(3764)

「谷近く(知可久)家は居れども」(4209) 「フジに近く(知可久)を来鳴きてよ」(4438) 「里近く(知加久)君がなりなば」(3939)

○つれもなく

1 「つれもなく(都禮毛奈久)離れにし妹を」(4184)

「つれもなく(都禮母奈久)離れにしものと」(4198)

○ときじく

1 「時じく(時自久)そ雪は降るといふ」(26) 「時じく(時自久)そ雪は降りける」(317) 「時じく(時自久)そ人は飲むといふ」(3260)

○とのしく

1 「とのしく(等乃斯久)もさぶしけめやも」(878)

○とほく

1 「妹そ遠く(等保久)は別れ来にける」(3698) 「遠く(等保久)渡りて」(4334) 「遠く(登保久)離り

上」(3688)

2 「道はし遠く(騰保久)関さへに隔りてありこそ」(3978)

○とほながく

1 「いや遠長く(遠長久)惚ひ行かむ」(196)

○ともしく

1 「山見れば見のともしく(等母之久)川見れば見のさやけく」(4360) 「あやにともしく(乏敷)鳴る神の」(913) 「ともしくも(乏雲)並び居るかも」(1210)

○ながく

1 「年の緒長く(奈我久)逢はざれど」(3775) 「年の緒長く(奈我久)しなぎかる越にし住めば」(4154)

「我は参る来む年の緒長く(奈我久)」(4298) 「隔りにけらし年の緒長く(奈我久)」(4308) 「年の緒長く(奈我久)相見ずは」(4408) 「置きてや長く(奈何久)我が別れなむ」(891) 「御寿は長く(長久)天足らしたり」(442) 「年の緒長く(長久)住まひつゝ」(460) 「年長く(長久)病みし渡れば」(897) 「下にも長く(長久)汝が心待て」(3309) 「年の緒長く(長久)相見てし」(4248)

○なく

1 「絶ゆることなく(奈久)咲き渡るべし」(830) 「今日や過ぎなむ言問ひもなく(奈久)」(884) 「すべもなく(奈久)寒くしあれば」(892) 「すべもなく(奈

久) 苦しくあれば」(899)「跡もなく(奈久) 思ひし君に」(1613)「つつむことなく(奈久) はや帰りませ」(3582)「間なく(奈久) や妹に恋ひ渡りなむ」(3660)「暇なく(奈久) 海人のいざりは燈し合へり見ゆ」(3672)「安けくもなく(奈久) 悩み来て」(3694)「喪なく(奈久) 行かむと」(3694)「喪なく(奈久) はや来と」(3717)「すべもなく(奈久) 苦しき旅も」(3763)「梶取る間なく(奈久) 思ほえし君」(3961)「間なく(奈久) しば鳴く」(3973)「絶ゆることな(奈久) 古ゆ今の現にかくしこそ見る人ごとにかけてしのはめ」(3985)「絶ゆることなく(奈久) あり通ひ見む」(4002)「別くこともなく(奈久) 白たへに雪は降り置きて」(4003)「繁き恋かも和ぐる日もなく(奈久)」(4019)「梶取る間なく(奈久) 都し思ほゆ」(4027)「行くへなく(奈久) あり渡るとも」(4090)「絶ゆることなく(奈久) この山のいや継ぎ継ぎにかくしこそ仕へ奉らめ」(4098)「絶ゆることなく(奈久) 仕くつつ見む」(4100)「絶ゆることなく(奈久) 我かへり見む」(4157)「常もなく(奈久) うつろふ見れば」(4160)「絶ゆることなく(奈久) あをによし奈良の都に万代に国知らさむと」(4266)「梶取る間なく(奈久) 恋は繁けむ」(4336)「つつみなく(奈久) 妻は待たせと」(4408)「間な

く(奈久) そ奈良は恋しかりける」(4461)「つつむことなく(奈久) 舟は早けむ」(4514)「絶ゆることなく(無久) またかへり見む」(37)「思むことなく(無久) 通ひつつ」(79)「我も事なく(無久) 今も見ることたぐひてもがも」(34)「忘るる日なく(無久) 思へども」(647)「止む時もなく(無久) 見てむとそ思ふ」(392)「間なく(無苦) し思へば」(702) 2 「この川の絶ゆることなく(奈久) この山のいや高知らす」(36)「追ふごとくに許すことなく(奈久) 手放れもをちかもやすき」(401)「つつみなく(無久) 幸くいまして」(894)

○なつかしく
1 「いやなつかしく(奈都可之久) 相見れば」(3978)「いやなつかしく(奈都可之久) 聞けど飽き足らず」(4176)

○にはしく
1 「にはしく(爾波之久) も負ふせたまほか」(4389)

○ぬるく
1 「ぬるく(奴流久) は出でず」(3875)

○はやく
1 「早く(半夜久) な散りそ」(849)「はやく(波夜久) 来て」(3627)「早く(波夜久) なりなむ」(3978)「早く(波夜久) 至りて」(4331)

○ひさしく

- 1 「久しく(比左之久) 見むを」(3714) 「久しく(比左思久) なりぬ」(4028) 「ともに久しく(比佐斯久) 言ひ継げと」(814)

○ふかく

- 1 「色深く(夫可久) 背なが衣は染めましを」(4244)
「水底深く(布可久) 思ひつ」(4491)

○まがなしく

- 1 「ま悲しく(心悲久) ひとり行く兎に」(1743)

○まさきく

- 1 「ま幸く(麻佐吉久) もありたもとほり」(4008) 「ま幸く(麻佐吉久) も早く至りて」(4331)

○まとほく

- 1 「ま遠く(麻登保久) 思ほゆ」(3522)

○まねく

- 1 「まねく(真根久) 行かば」(207) 「まねく(麻祢久) 通へば」(787) 「狩らぬ日まねく(麻祢久) 月そ経にける」(4012) 「聞かぬ日まねく(麻祢久) 天離る鄙にし居れば」(4169)

○みがほしく

- 1 「いや見がほしく(見我保之久) み雪降る」(4111)

○めぐく

- 1 「めぐく(愍久) や君が恋に死なせむ」(2560)

○めづらしく

- 1 「いやめづらしく(目都良之久) 八千種に草木花咲き」(4166) 「めづらしく(目類志久) かけて思はぬ月も日もなし」(3172) 「めづらしく(目類布) 今も見てしか」(1627) 「さやめづらしく(米豆良之久) 思ほゆるかも」(4084) 「めづらしく(米都良之久) 鳴くほととぎす」(4089) 「めづらしく(米頭良之久) 降れる大雪」(4285) 「さやめづらしく(米頭良之久) 咲く花を」(4167)
- 2 「咲く花の色めづらしく(目列敷) 百鳥の声なつかしき」

○もく

- 1 「石つじもく(木丘) 咲く道を」(185)

○やすく

- 1 「安く(夜須久) 寝る夜は」(3760) 「安く(夜須久) 寝むかも」(4348) 「移ろひやすく(安久) 思へかも」(583)

○ゆたけく

- 1 「手本ゆたけく(寛久) 人の寝る」(2963)

○ゆゆしく

- 1 「ゆゆしく(思忌久) も我は嘆きつるかも」(2893)

○よく

1 「よく（四来）見」（27）

○よろしく

2 「玉だすきかけのよろしく（宜久）遠つ神我が大君の行幸の山越す風のひとり居る我が衣手に朝夕にかへらひぬれば」（5）

以上のように形容詞連用形を修飾法（1）と中止法（2）とに分類した結果、その大半が修飾法であることが瞭然としてゐる。形容詞は意味的に言えば事物の性質や状態をあらわすものであり、連体形や連用形による装定形式で、修飾法としてその本質が端的に示されることになるが、前の連用形の用例が圧倒的な量で修飾法としてあらわれていることはそれを裏付けているものと考えられる。

中止法は、意味に関してさらに二種に区分できる。その一つは、後の叙述と対等の関係を構成し、前句と後句とを入れ替えても表現内容が変わることがない形で、前句と後句とが対等ならばことばから「並列法」と称される用法であり、もう一つは、先に成立したことを後に成立することへ続ける関係を構成し、前句と後句とは入れ替えることが不可能な、順序のあることから「序列法」と称される用法である。

並列法は、中止法の典型的な用法であり、「かなしく

めぐし」（4106）や「さやけく清し」（333）のように、後に並列する語を置いて語と語を対等につなげたり、「父母を見れば貴く妻を見ればかなしくめぐし」（4106）や「追ふごとに許すことなく手放れもをちかかもやすき」（4011）のように、前句と後句をつなげたりと、中止法の用例のうち多くを占めるものである。

序列法については、文脈の捉え方によつて異なる解釈の余地があるのだが、

直に逢はずあらくも多くしきたへの枕去らずて
夢にし見えむ(809)

さし交へて寝ても来ましを玉梓の道はし遠く
さへに隔りてありこそ…(3978)

という例を見てみると、3978では、離れて来た妻と会いたいのが道のが遠い、という事態を述べた上で、道中には関所までもあると、助詞サへによつて、更に会うのに困難な事態を加えており、単に事態をならべたのではなく、前後の順が定まっているから、序列法として確かな例だと言えるだろう。809では、直接に会っていない年月が多い、という事態を前提に、相手の夢に出てゆくこととする。やはり序列法の用法であると認められ、この809の場合、事態の前後関係があらわされているだけでなく、前句と後句に因果関係をも認めることができる。

これらの表現に関連して、形容詞連用形に助詞テが接した場合についても、単独用法の場合と同様に用例を掲げて検討しておく。

○こごかく

1 谷近く 家は居れども 木高くて (許太加久氏) 里はあれども ほととぎす いまだ来鳴かず…(4209)

○しげく

2 かくばかり 面影のみに 思ほえば いかにかもせむ

人目繁くて (繁而) (752)

○なく

1 しなが鳥 猪名野を来れば 有間山 夕霧立ちぬ 宿りはなくて (無而) (1140)

隠したる 梶棹なくて (無而) 渡り守 舟貸さめや

も しましはあり待て (2088)

ますらをの 心はなくて (無而) 秋萩の 恋のみに

やもなづみてありなむ (1222)

2 …近くあらば 帰りにだにも うち行きて 妹が手枕

今日よりは 顧みなくて (奈久弓) 大君の 醜のみ

楯と 出で立つ 我は (4373)

…もしきの 大宮人の まかり出て 遊ぶ舟には 梶

棹も なくて (無而) さぶしも 漕ぐ人なしに (592)

…もしきの 大宮人の まかり出て 漕ぎける舟は

棹梶も なくて (無而) さぶしも 漕がむと思へど (60)

しきたへの 枕をまきて 妹と我と 寝る夜はなくて

(無而) 年ぞ経にける (2615)

○まさきく

2 ま幸くて (好去而) またかへり見む ますらをの

手に巻き持てる 鞆の浦廻を (1183)

天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに 出でて

来し 我を送ると あをによし 奈良山過ぎて 泉川

清き河原に 馬留め 別れし時に ま幸くて (好去而)

我帰り来む 平けく 齋ひて待てと 語らひて…(395

7)

大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらをの

心振り起こし 取り装ひ 門出をすれば たらちねの

母掻き撫で 若草の 妻取り付き 平けく 我は齋は

む ま幸くて (好去而) はや帰り来と ま袖もち 涙

を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば…(4398)

○ましかく

2 まを薦の 節の間近くて (未知可久弓) 逢はなへば

沖つま鴨の 嘆きそ 我がする (3524)

形容詞連用形の用例については、単独用法だけを掲げたが、助詞テの接するものは、テが単純な順接をあらわ

すためか、単独用法の場合と同様に扱えるようである。

例えば、「谷近く 家は居れども 木高くて 里はあれども」(4209)や「夕霧立ちぬ 宿りはなくて」(1149)など助詞テの接した形で、修飾法であると思なせる例があり、助詞テの接した形は、単独用法と同じく修飾法・中止法の双方に亘って存在している。ここに序列法として分類した例も、修飾法との差が見えにくいものがある。特に、4273・2619の「なくて」や、最後の三首に見える「ま幸くて」はそう言えるかもしれない。一方で、257・260の「なくて」はその主語が「梶棹」「棹梶」で、「さぶし」の主語と異なっていることからも序列法の例として確かであり、さらには単に前後の順序のみならずそこに因果関係をも含みこんでいると解することができる。

さて形容詞連用形を概観した結果、形容詞連用形の各用法は、数量的に、

連用修飾法√連用中止法(並列法√序列法)

と、不等号で示すことができる。

形容詞の意味から考えてみると、前述のように、形容詞が属性概念をあらわす品詞であるという点において連用修飾法の用例が最も多いことが納得されるとしたので

あるが、連用中止法になると、後句を修飾するという機能が相当希薄に、もしくは全く無くなっている。両機能の違いは、確実に二者択一できるような明らかな違いをもっているものもあるが、文脈によってある程度のゆれを認めざるを得ないものもある。前に示した不等号の図式は、数量としての多寡をあらわすと同時に、後句への続き方において、修飾性の方がおそらく形容詞本来の性格に合った用法であることを示し、修飾法・中止法の区別がはっきりとしない用例は、中止法へと用法が変わってゆく途上にあるものではないかと私は考えている。

ここで現代から見て用法上異なると思われるのは、序列法、特に原因理由をあらわす用法、例えば「山が高く登れない」「山が高く日の落ちるのが早い」などに相当する用例の数が少ないという点である。短絡的な比較は慎むべきであるが、現代においては、形容詞の連用形は、助詞テと接する形で用いて、原因理由を言いあらわす用例も多く、それに比べると上代では、原因理由を表わす用法は未発達だったかのように思われる。しかし上代人が、原因理由を表わす因果の観念そのものをあまり意識しなかったとは考えられない。この原因理由を表わす表現は、当時にあっても必ず必要だったはずである。その不足した表現法を補っていたのが、ミ語法であったのではないか。

次にミ語法について考えてみる。以下に形容詞連用形を示したのと同様に、ミ語尾の用例を掲げる。ミ語尾における連用接続の実状を明示するため、引用のトが下接するもの、また「心いたみ(伊太美) 我が思ふ妹が」(352)、「愛しみ(宇流波之美) 我が思ふ君は」(451)や、「ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかも 愛しみ(宇流波之美) すれ」(408)、「我が思ふ君を なつかしみ(奈都可之美) せよ」(409)などと、思フ・ス、に接した形をとって感情の内容を表現するものについては除外している。引用に際し、並列法のもの(1)と序列表のもの(2)とに分けた。

○いたはしみ

2 「ますらをの言いたはしみ(勞美) 父母に申し別れて家離り海辺に出で立ち」(4211)

○いたみ

2 「風をいたみ(伊太美) 綱は絶ゆとも」(3380) 「立ち

ちしき寄せ来あゆをいたみ(伊太美) かも」(4093)

「心をいたみ(伊太美) みどり子の乳をふがごとく

天つ水仰ぎてそ待つ」(4122) 「風をいたみ(疾見)

舟寄せかねつ」(4101) 「あゆをいたみ(疾美) 奈良

の浦廻に寄する波」(4213) 「心を痛み(痛見) ぬえ

こ鳥うらなけ居れば」(5)

○いとはしみ

2 「二つの海を厭はしみ(厭見) 潮干の山を憫ひつるかも」(3819)

○うつくしみ

2 「愛しみ(宇都久之美) 帯は解かなあやにかも寝む」(422) 「愛しみ(宇都久之美) 結は解かなあやにかも寝む」(423) 「言うつくしみ(愛美) 出でて行かは」(2343) 「愛しみ(愛美) 君にたぐひて山路越え来ぬ」(3149) 「旅行く君を愛しみ(愛見) たぐひてそ来し」(566)

○うらわかみ

2 「折らむとすれどうら若み(宇良和可美) こそ」(3574) 「今する妹をうら若み(浦若三) いざ率川の音のさやけさ」(1112) 「うら若み(浦若見) 花咲きかたき」(788) 「うら若み(浦若見) 笑みみ怒りみ付けし紐解く」(2627) 「うら若み(丁壮香見) 人のかざししなでしこが花」(1610)

○うるはしみ

2 「浦うるはしみ(愛見) 神代より千舟の泊つる」(1067) 「君が心を愛しみ(宇流波之美) この夜すがらに眠も寝ずに」(3969)

○おほほしみ

2 「おほほしみ(薨三)妻恋すらし」(2150)

○おほみ

2 「あるき多み(於保美)目こそ離るらめ」(3367)「まさかこそ人目を多み(於保美)汝を端に置けれ」(3496)「渡る瀬多み(於保美)この我が馬の足掻きの水に衣濡れにけり」(4022)「聞けばしのはく逢はぬ日を多み(於保美)」(4168)「まことそ恋ひし逢はぬ日を多み(多美)」(2888)「人目を多み(多見)まねく行かば」(207)「人目多み(多見)逢はなくのみそ」(770)「神さびて齋ふにはあらず人目多み(多見)こそ」(1377)「障り多み(多見)我が思ふ君に逢はぬころかも」(2745)「人目を多み(多見)妹に逢はぬかも」(2910)「人目多み(多見)目こそ忍ぶれ」(2911)

○かしこみ

2 「大君の命恐み(可之古美)あしひきの山野障らず天離る鄙も治むる」(3973)「大君の命恐み(可之古美)食す国の事取り持ちて若草の足結たづくり群鳥の朝立ち去なば」(4008)「命恐み(可之古美)磯に触り海原渡る」(4328)「大君の命恐み(可之古美)妻別れ悲しくはあれどますらをの心振り起こし取り装ひ門出をすれば」(4398)「大君の命恐み(可之古美)青雲のとのびく山を越よて来ぬかも」(4403)「大

君の命恐み(可之古美)玉梓の道に出で立ち岡の岬い廻るごとに万度顧みしつはるはるに別れし来れば」(4408)「大君の命恐み(可之古美)愛しけ真子が手離り島伝ひ行く」(4414)「大君の命恐み(可之故美)大舟の行きのまにまに宿りするかも」(2644)「大君の命恐み(可思古美)かなし妹が手枕離れ夜立ち来ぬかも」(3486)「大君の命恐み(加之古美)あしひきの山越え野行き天離る鄙治めにと別れ来し」(3978)「大君の命恐み(加之古美)弓のみたさ寝か渡らむ長けこの夜を」(4394)「人君の命恐み(加之古美)大の浦をそがひに見つつ都へ上る」(4472)「大君の命恐み(加志古美)出で来れば」(4358)「足柄のみ坂恐み(加思古美)曇り夜の我が下延を言出でつるかも」(3371)「高み恐み(恐見)天雲もい行きはばかり」(321)「大君の命恐み(恐見)さし並ぶ国に出でます」(1020)「波を恐み(恐見)淡路島見ずや過ぎなむ」(1180)「神といませばそこをしもあやに恐み(恐美)昼はも日のことごと」(204)「波を恐み(恐美)淡路島磯隠り居て」(388)「大君の命恐み(恐美)天さがる夷治めにと」(1785)「大君の命恐み(恐弥)磯城島の大和の国の石上布留の里に紐解かず丸寝をすれば」(1787)「命かしこみ(畏美)にきびにし家を置き」(79)

○かなしみ

- 2 「我は家思ふ宿りかなしみ(加奈之弥)」(1690)「あやにかなしみ(加奈之美)置きて高来ぬ」(4387)「思ひそ我がする別れ悲しみ(悲美)」(4242)「遠音にも聞けば悲しみ(悲弥)にはたづみ流るる涙留めかねども」(4214)「我は家思ふ慮り悲しみ(鮑染)」(1238)

○きよみ

- 1 「月夜を清み(清美)梅の花心開けて我が思へる君」(1661)
- 2 「月読の光を清み(伎欲美)神島の磯間の浦ゆ舟出す我は」(3599)「月読の光を清み(伎欲美)夕なぎに水手の声呼び浦廻漕ぐかも」(3622)「浜辺を清み(清三)うちなびき生ふる玉藻に」(931)「布当の野辺を清み(清見)こそ大宮所定めけらしも」(1051)「うべも恋ひけり山川清み(清見)」(1131)「滝を清み(清美)か古ゆ宮仕へけむ」(1035)「浜清み(清美)い行き反らひ見れど飽かぬかも」(1177)「浜清み(清美)磯に我が居れば」(1204)「底清み(清美)沈く石をも玉とそ我が見る」(4199)「川門を清み(清美)後れ居て恋ふれば都いや遠そ来ぬ」(4258)
- くすしみ
- 2 「あやに奇しみ(久須之弥)行き変はる」(4125)

○くるしみ

- 2 「旅を苦しみ(久流之美)恋ひ居れば」(3674)「花橘を花ごめに玉にそ我が貫く待たば苦しみ(久流之美)」(3998)「直渡り来ぬ待たば苦しみ(苦三)」(2085)「言だにも告げにぞ来つる見れば苦しみ(苦弥)」(2006)

○けながみ

- 2 「思ひそ我が来る旅の日長み(気長弥)」(942)

○こころしみ

- 2 「若根(こ)しみ(許其思美)菅の根を引かば難みと標のみそ結ふ」(414)

○こころぐみ

- 1 「心ぐみ(意具美)我が思ふ児らが」(3057)

○こだかみ

- 2 「山を木高み(木高三)夕月をいつかと君を待つが苦しさ」(3008)

○こちたみ

- 2 「人言を繁み言痛み(許知痛美)己が世にいまだ渡らぬ」(116)「人言を繁み言痛み(言痛三)我妹子に去にし月よりいまだ逢はぬかも」(2895)「人言を繁み言痛み我が背子を目には見れども逢ふよしもな」(2938)

○こひしみ

2 「恋しみ（故非之美）妹を夢にだに久しく見むを」

(371c) 「見ずて行かば益して恋しみ（恋石見）雪消する山道すらをなづみてぞ我が来る」(382) 「ひとりのみ見れば恋しみ（恋染）神奈備の山のみみち葉手折り来り君」(3224)

○さまねみ

2 「月重ね見ぬ日さまねみ（佐末祢美）恋ふるそら安くしあらねば」(4116) 「見ぬ日さまねみ（佐麻祢美）恋しけむかも」(3995)

○さむみ

2 「雁がねは使ひに来むと騒くらむ秋風寒み（左無美）その川の上に」(3953) 「衣手寒み（寒三）妻まかむとか」(2165) 「夜を寒み（寒三）朝戸を開き出で見れば」(2318) 「雪寒み（寒三）咲きには咲かず」(2329) 「浜風寒み（寒弥）己妻呼ぶも」(1198)

○しげみ

1 「人言を繁み（繁三）言痛み」(2895) 「人言を繁み（繁三）言痛み」(2938) 「人言を繁み（繁美）言痛み」(116)

2 「恋繁み（思気美）慰めかねて」(3620) 「木立を繁み（繁三）朝去らず来鳴きとよもす」(1057) 「言繁み（繁三）丸寝そ我がする」(2305) 「人目を繁み（繁見）石橋の間近き君に恋ひ渡るかも」(597)

○しづけみ

2 「辺波静けみ（安美）漁りすと藤江の浦に舟そ騒ける」(939)

○たかみ

1 「嶺高み（太可美）谷を深みと落ち激つ清き河内に」(4003) 「山高み（高三）川とほしろし」(324) 「山高み（高三）白木綿花に落ち激つ滝の河内は見れど飽かぬかも」(909) 「富士の嶺を高み（高見）恐み」(321) 「山高み（高見）白木綿花に落ち激つ夏身の川門」(1736) 「山高み（高美）川とほしろし」(4011)

2 「沖辺には白波高み（多可美）浦廻より漕ぎて渡れば」(363) 「湊には白波高み（多可美）妻呼ぶと渚鳥は騒く」(4006) 「印南つま白波高み（多可美）よそこかも見む」(3596) 「さざみの山を高み（高三）かも大和の見えぬ」(4) 「沖波高み（高三）己が妻呼ぶ」(165) 「山高み（高三）降り来る雪を」(1841) 「川波高み（高見）滝の浦を見ずかなりなむ」(1722) 「三笠の山を高み（高御）かも月の出で来ぬ」(980) 「高円山を高み（高弥）かも出で来る月の遅く照るらむ」(981)

○たふとみ

1 「あやに貴み（多数刀美）嬉しけく」(4094)

2 「ますらをの心思ほゆ大君の命の幸を開けば貴み（多

布刀美)」(4095)「いや立て思ひし増さる大君の命の幸の聞けば貴み(貴美)」(4094)

○ちかみ

2「雁が来鳴かむ時近み(知可美)かも」(3947)「うちなびく春を近み(知可美)かぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ」(4188)「五月を近み(近美)あえぬがに花咲きにけり」(1507)「日を近み(近見)心にむせひ」(925)「川近み(近美)瀬の音ぞ清き」(1050)「山近み(近見)鳥が音とよむ」(1050)「浜辺を近み(近見)朝はふる波の音騒き」(1062)「海近み(近見)海人娘子らが乗れる舟見ゆ」(1063)

○とほみ

2「山川のそきへを遠み(登保美)はしきよし妹を相見ずかくや嘆かむ」(3964)「ほととぎす鳴く音遙けし里遠み(騰保美)かも」(3988)「ほととぎす待てど来鳴かずあやめぐさ玉に貫く日をいまだ遠み(遠美)か」(1490)「我がやどの萩咲きにけり秋風の吹かむを待たばいと遠み(遠弥)かも」(4219)「大和の見えぬ国遠み(遠見)かも」(47)「京を遠み(遠見)いたづらに吹く」(52)「渡りを遠み(遠見)ここに通はず」(1058)「遠み(遠見)こそ目言離るらめ」(2647)

○ともしみ

1「あやにともしみ(登母志美)しのひつ」(4006)
2「玉に貫く花橘を乏しみ(箒毛之美)しこの我が里に来鳴かずあるらし」(3984)「見ればともしみ(そ見)大和偲ひ」(367)

○ながみ

2「夜を長み(奈我美)眠の寝らえぬに」(3680)「秋の夜を長み(奈我美)にかあらむなぞこは眠の寝らえぬも」(3684)「妻別れ悲しくありけむ年の緒長み(奈我美)」(4333)

○なつかしみ

2「野をなつかしみ(奈都可之美)一夜寝にける」(1424)「藤波の花なつかしみ(奈都可之美)引き攀ちて袖に扱入れつ」(4192)「山なつかしみ(名付染)出でかてぬかも」(1332)

○なみ

1「この九月の過ぎまくをいたもすべなみ(無見)あらたまの月の変はらばせむすべのたどきを知らに」(3329)

2「我はそ恋ふる舟楫をなみ(名三)」(935)「神をそ我が祈むいたもすべなみ(奈見)」(3286)「求めそ我が来し恋ひてすべなみ(奈見)」(3320)「いたもすべなみ(奈美)蘆鶴の音のみし泣かゆ」(456)「たく恋ひむな逢ふよしをなみ(奈美)」(508)「着る

身なみ(奈美)腐し捨つらむ絶綿らはも(900)「かくや嘆かむせむすべをなみ(奈美)」(901)「いたづらに地に散らせばすべをなみ(奈美)攀ちて手折り」(1507)「妹に逢はずあらばすべなみ(奈美)岩根踏む生駒の山を越えてそ我が来る」(3590)「またそ置きつる見る人をなみ(奈美)」(3628)「粟島をよそにや恋ひむ行くよしをなみ(奈美)」(3631)「駿なみ(奈美)思ひわぶれて寝る夜しそ多き」(3759)「間使ひも遣るよしもなみ(奈美)思ほしき言も通はず」(3969)「相見ねばいたもすべなみ(奈美)してきたへの袖返しつ寝る夜落ちず夢には見れど現にし直にあらねば恋しけく千重に積もりぬ」(3978)「寄るへなみ(奈美)左夫流その児に」(4106)「秋付けは黄葉散らくは常をなみ(奈美)こそ」(4161)「宮の内に千鳥鳴くらし居む所なみ(奈美)」(4288)「いとすべなみ(奈美)八度袖振る」(4379)「使ひをなみ(奈美)や恋ひつつ行かむ」(4412)「佐保道をば荒しやしてむ見るよしをなみ(奈美)」(4477)「すべをなみ(無三)秋の百夜を願ひつるかも」(548)「いたもすべなみ(無三)ぬばたまの夜はすがらに赤らひく日も暮るるまで嘆けども」(619)「よしをなみ(無三)よそのみにして嘆きそ我がする」(714)「よしをなみ(無三)常かくのみや恋ひ渡りなむ」

(1323)「すべをなみ(無三)出でてそ行きし」(2551)「恋ひてすべなみ(無三)白たへの袖返ししは」(2812)「すべをなみ(無三)千度嘆きて恋ひつつそ居る」(2901)「行くへなみ(無三)隠れる小沼の」(3022)「音のみそ我が泣くいたもすべなみ(無三)」(3218)「すべをなみ(無見)妹が名呼びて袖を振りつる」(207)「逢ふよしをなみ(無見)岩根さくみてなづみ来し」(210)「いたもすべなみ(無見)奈良山の小松が下に立ち嘆くかも」(593)「恋ひかも瘦せむ逢ふよしをなみ」(2976)「神をそ我が祈むいたもすべなみ(無見)」(3284)「神にそ我が祈むいたもすべなみ(無見)」(3288)「思へども駿をなみ(無見)嘆けども奥かをなみ」(3324)「嘆けども奥かをなみ(無見)大御袖行き振れし松を言問はぬ木にはありともあらたまの立つ月ごと天の原振り放け見つつ玉だすきかけて惚はな」(3325)「ひとりして見るしるしなみ(無美)海神の手に巻かしたる玉だすきかけて惚ひつ」(366)「鴻をなみ(無美)葦辺をさして鶴鳴き渡る」(919)「すべをなみ(無美)我は言ひてき思むべきものを」(2974)「なづみぞ我が来し恋ひてすべなみ(窮見)」(3257)

○はやみ

2「音しば立ちぬ水脈速み(波也美)かも」(4460)「川

の瀬速み(波夜美)紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ」

(861)「赤駒が足掻きを速み(波夜美)言問はず来

ぬ」(3540)「風早み(波夜美)沖つみ浦に宿りする

かも」(3646)「潮速み(早三)磯廻に居れば」(1234)

「梶の音高し水脈速み(早見)かも」(1143)「行く

瀬を速み(早見)早けむと」(2713)「瀬を速み(速

見)我が馬つまづく家思ふらしも」(1191)「瀬を速

み(速見)落ち激ちたる白波に」(2164)「奥山の真

木の板戸を音速み(速見)妹があたりの霜の上に寝

ぬ」(2616)「川速み(速弥)瀬の音そ清き」(1005)

○ひさしみ

2「逢はず久しみ(久美)うべ恋ひにけり」(310)「見

ぬ日久しみ(久弥)恋ひしけむかも」(3995 一五)

○ひろみ

1「野を広み(比呂美)草こそ繁き」(4011)「山川を

広み(比呂美)厚み」(4094)

2「野を広み(比呂美)延ひにしものをあぜか絶えせ

む」(3434)「瀬を広み(広弥)打橋渡す」(328)

○ふかみ

2「草深み(深三)こほろぎさはに鳴くやどの」(2271)

「渡り瀬深み(深見)我が背子が旅行き衣濡れひた

むかも」(3315)「渡り瀬深み(深弥)舟浮けて」(2067)

○まかなしみ

2「まかなしみ(麻可奈思美)寝らくしけらく」(3358

或本歌)「まかなしみ(麻可奈思美)さ寝に我は行

く」(3560)「まかなしみ(麻可奈思美)寝れば言に

出」(3466)「宮に行く子をまかなしみ(真悲見)留

むれば苦し」(532)

○まだしみ

2「時をまだしみ(麻多之美)来鳴かなく」(4207)

○まねみ

2「逢はぬ日まねみ(麻祢美)思ひそ我がする」(4198)

○みじかみ

2「髪を短み(短弥)青草を髪にたくらむ」(2540)

○めづらしみ

2「ほととぎすをやめづらしみ(希将見)今か汝が来

る」(1962)

○やさしみ

2「君をやさしみ(夜佐之美)表はさずありき」(854)

○やすみ

2「覆ふをやすみ(安美)明けていなば」(93)「目を

安み(安見)人妻故に我恋ひにけり」(3093)

○ゆゆしみ

2「言はばゆゆしみ(由遊思美)礪波山手向の神に幣

奉り我が乞ひ禱まく」(4008)「言はばゆゆしみ(忌

染)朝顔のほには咲き出ぬ恋もするかも」(2275)

○よみ

- 2 「高知らせるは山川を良み(吉三)」(1006)「月を良み雁が音聞こゆ今し来らしも」(213)「浦を良み(吉美)うべも釣はず」(938)「涙を良み(吉美)うべも塩焼く」(938)「花を良み(吉美)鳴くほととぎす」(1483)「月夜良み(好三)妹に逢はむと」(2618)「月夜良み(好美)夕々見せむ」(2346)「月夜良み(好見)門に出で立ち妹か待つらむ」(765)

○よろし

- 2 「作る屋の形を宜し(宜美)うべ寄そりけり」(3820)

○わかみ

- 2 「いまだ咲かなくいと若み(若美)かも」(786)「草若み(若美)隠らひかねて」(2267)

○をしみ

- 2 「うぐひす鳴くも散らまく惜し(乎之美)」(842)「別れを惜し(乎之美)嘆きけむ妻」(4332)「手離れ惜し(乎思美)泣きし児らはも」(3569)「散らまく惜し(怨之美)我が園の竹の林にうぐひす鳴くも」(824)「己が名惜し(惜三)間使ひも遣らずて我は」(946)「萩の花散らまく惜し(惜三)競ひ立つ見ゆ」(2108)「名をしも惜し(惜三)埋れ木の下ゆそ恋ふる」(3723)「命を惜し(惜美)波に濡れ伊良虞の島の玉藻刈り食む」(24)「花橘を

君がため玉にこそ貫け散らまく惜し(惜美)」(1502)「もみち葉の過ぎまく惜し(惜美)思ふどち遊ぶ今夜は」(1591)「もみち葉を散らまく惜し(惜見)手折り来て今夜かざしつ」(1586)「さ雄鹿は散らまく惜し(惜見)鳴き行くものを」(2155)

動詞連用形相当のミ語尾の連用中止法の内訳をみてみると、「浜清み 浦うるはしみ」(1061)や「山高み 川とほしろし」(401)などのように並列法も見られるが、多くは「うら若み 花咲かたき 梅を植ゑて」(786)や「風を疾み 舟寄せかねつ 心は思へど」(256)などのように序列法であり、更にそのほとんどの例は原因理由をあらわす用法として解せる。

このようなミ語尾の用例を、前に見た形容詞連用形の用例と照らし合わせてみると、両者が同じように連用接続として文を構成していながら、用法から見てかなり偏った分布をしていることがわかる。その偏り方は、形容詞連用形は修飾法に偏り、ミ語法は中止法、特に序列法に偏っている。つまり形容詞連用形に不足していた、序列法(特に原因理由を示す)を補っていると見える。

このように形容詞連用形の用法をミ語尾が補って存在すると見ることに關しては、後代において形容詞連用形

にいわゆる存在詞アリの接する形が積極的に用いられてゆき、いわゆる補助活用（カリ活用）として定着するという経緯が示唆的である。形容詞は、存在詞を介する形で、助動詞に接したり、接続助詞バに接して仮定条件をあらわしたりと様々な用法を獲得することになるのだが、アリを介在させなければならなかったという点から、形容詞そのものに動詞性が不足していたと考えることができる。本稿で述べた形容詞連用形についても同じで、やはり動詞性が欠落しており、そのため動詞語尾に類似したミ語尾を接続させて、その欠を補っていたと考える

こともできる。

このように補助活用までを視野におさめれば、萬葉集という一文獻上に限った形容詞連用形のいわば共時的な考察は、形容詞の活用体系と意義の変遷についての通時的な指針を与えることになると思われる。本稿は形容詞連用形を中心としてその周辺を探り、これからの体系的研究の指針を得ようとした一つの試みである。

（おおはた かずひろ・研修員）